

ソーシャルワーク調査研究の構造的理解

窄山 太

Abstract

This paper considered social work research from the following three points. (1) The purpose and object of social work research. (2) Relevance of data and an analysis method. (3) Connection of the research purpose, a research question, and analysis method. The structure of research was illustrated from the contents of consideration, and it summarized to the following four points. (1) The researcher set up a “subject of research” by being conscious of “a phenomenon” as a problem about social work research. (2) The researcher collect required data by facing “a phenomenon” based on a “research question”. (3) A researcher infers with reference to the “theoretical framework” relevant to social work, and draws a “conclusion”. (4) By a “conclusion”, the researcher solves a “research question”, and sets up a new “subject of research” and “research question”. In addition, this paper can be regarded as consideration about the scientific attitude to a social worker’s practice. It is because social work practice is not performed by an individual’s interpretation but it is carried out based on the scientific reasoning which social work has.

I. 本稿の目的

本稿では、ソーシャルワーク調査研究 (social work research) を行う者 (以下、研究者という) が研究を進めていく上で留意しておきたい枠組について考える。ソーシャルワークあるいは社会福祉領域においても調査研究を学ぶための書籍が複数出版されており、その内容を理解していくことで調査研究に関する必要な知識を得ることができる¹⁾。そして、研究者が実際にソーシャルワーク調査研究を行おうとする際には、こうした知識に基づいて「どのようなテーマについて、何のために、どのような方法で対象にアプローチし、そしてどのような結果を得たいのか」といった「研究を進めていくための枠組」(以下、研究枠組という) を持っていることが必要となる。

この研究枠組としての「何のために」、「どのようなこと」、「どのような方法」、「どのような結果」といった項目は、「研究目的の明確化」、「研究テーマと研究課題の設定」、「データ収集と分析方法の選定」、「分析結果の解釈と理論体系との関連性に関する考察」といった研究者が研究で行う研究過程の内容としてとらえることができる。以下では、こうした観

点に立つて、①ソーシャルワーク調査研究の目的と対象、②データ収集・分析と推論の関連性、③研究課題、データ、分析法の関連性という3点から、ソーシャルワーク調査研究法の構造について考えていく。

本稿で使用する用語をここで意味づけておきたい。研究目的とは「研究が目指すものあるいは意図するもの」と意味づける。研究テーマとは「研究者が具体の事象において明らかにしたい関心事あるいは問題意識」とし、研究課題は「実際の研究において具体的に設定される問題」と意味づける。すなわち、研究課題とは研究テーマを作業の観点からとらえ直し具体的に設定したものといえる。また、研究方法とは「研究を進めるための具体的作業の内容であり、主にデータ収集法とデータ分析法が組み合わされたもの」と意味づけておく。また、研究方法論とは「データから結論を導く考え方あるいはその道筋」、データ分析法は「収集されたデータを分析するための具体的手法」と意味づける。そして、研究枠組はこうした用語の意味づけをふまえて、「研究テーマに基づいて研究課題を設定、データ収集ならびに分析、結果の解釈へと至るための研究全体に関する方略

(strategy)」と意味づけ使用する。

なお、調査研究では設備や資金といった研究を支える環境が重要である。例えば、アンケートを実施する場合、先行研究を調べるための資料や検索システムの利用、調査票を配布・回収するための費用の確保、回収した調査票を分析するためのコンピューターシステムの利用、作業を補助してくれる人材の確保などが必要となる。しかしながら、研究枠組の内容を本稿の対象とすることから、これらは考察の対象から除外する。

II. ソーシャルワーク調査研究の目的と対象

(1) 研究の3つの目的

ソーシャルワーク調査研究の目的を取り上げるに際して、まず研究そのものが有する目的を整理しておく。ソーシャルワーク調査研究においても研究そのものが有する目的の範疇で実施されるためである。

研究では研究枠組が必要であり、これは研究テーマと研究課題の設定、データ・資料の収集、分析、解釈といった項目から構成されると考えられる。例えば、高橋(1998)は研究を「……一つの問題意識のもとに、明確に設定された一つの課題を解決するために、計画的・系統的に情報を収集し、それを適切な認知的枠組み(理論あるいは仮説)のもとに分析解釈し、さらにその成果を第三者がアクセスできるような形にまとめて社会に公表する、という一連の知的活動のことを指す」(p.1)と意味づけている。この定義にあるように、研究とは問題意識に基づいて設定された課題を解決するという目的のもとに取り組みられる「一連の知的活動」であるということが出来る。

調査研究では研究テーマならびに研究課題の設定が重要となる。研究テーマは研究目的の内容に応じて「記述」、「説明」、「応用」の3つに区分され、そして研究課題として具体的かつ操作的に表現される。なお、ここでは「応用」を「個人の経験的知識を含め、これまでに明らかにされた知見を活かして、目前の具体的事象への対応を検討すること」という意味で使用される。

この3つの区分については、例えば友枝(2000:274)は社会学の研究目的として「記述」「説明」「当為」の3つをあげ、その中で「当為」を「現実の社

会に存在する規範、制度、秩序の有効性や正当性を検討し、社会事象に対する政策的判断や価値判断を下すこと」と説明している。また、Punch(1998=2005:22)は「記述」と「説明」について、「記述は何が(what)事実であるかに注目するが、説明はなぜ(why)あるいはいかにして(how)何らかの事実が生じたかに注目する」として以下のように説明する。

……何かがなぜ(あるいはいかにして)起こるかを知れば、何が起こるかだけよりもずっと多くのことを知っていることになる。そのことによつて、私たちは将来何が起こるかを予測し、また、おそらくは将来起こることをコントロールすることができるようになる(Punch 1998=2005:22)。

ここで述べられる「将来起こることを予測し、コントロールすることができるようになる」ことが、友枝がいうところの「当為」と同様に、3つめの目的である「応用」の意図するところとして理解できると考える。

このように、「記述」、「説明」、「応用」の3つの目的は、「何のために」という問いに対する答えとなりうるものである。とりわけ「応用」を目的とする研究は、具体的事象を検討し、その結果において将来のあり方を示唆するという点で、実践科学としてのソーシャルワーク調査研究では特に重要であるといえる。なお、これらの3つは研究目的の違いによるものであり、研究そのものの優劣で区分されたものではないという点には留意すべきである。

(2) ソーシャルワーク調査研究の目的

岩田(2006a)は実践と対比させつつ社会福祉研究を以下のように意味づける。ここでは社会福祉研究として述べられているが、ソーシャルワークが岩田のいう「社会福祉援助論」の体系であることをふまえると(岩田2006b:85)、ソーシャルワークと読み替えてその内容を検討することができるものと考えられる。

社会福祉研究は、(略)、社会福祉という現実

の世界、つまりそこでさまざまな実践が行われ、個人的な体験が積み重ねられているような、現実の世界を対象として、ここでなされていること、その結果生じていること、なされようとしていること、になんらかの疑念を挟み、一定の研究的な手続きに従って現実をよく観察し、それらの原因や因果関係等を考え、合理的な説明や批判を試みようとする、一連の作業である（岩田 2006a：6）。

この所見に基づいてソーシャルワーク調査研究を理解するならば、ソーシャルワーク調査研究とは「ソーシャルワークという現実の世界において研究テーマを設定し、そこから導かれる具体的な研究課題に基づいて、計画的かつ系統的に現実を観察し、一定の理論枠組みのもとに分析・解釈を行い、その成果を公表すること」であるといえることができる。また、その目的について岩田（2006b：85）は以下のように述べている。

統制的仮説を扱うのはあらゆる学問分野ではなく、制御科学と呼ばれる分野に限られる。制御とは目標達成に向けて統制を行う（コントロールする）ことをいう。制御科学は、マクロな制度・政策レベルの制御、つまり一定の政策目標の達成のための仮説を構築するいわゆる政策科学（社会政策学、厚生経済学、社会福祉政策論など）と、ミクロな対人関係レベルでの制御であるいわゆる実践科学（臨床心理学、臨床医学、社会福祉援助論など）の2つに大別できる（岩田 2006b：85）。

このように、ソーシャルワークに関する研究が社会福祉援助論としてミクロな対人関係レベルの制御を目的とする研究活動であるならば、「応用」に相当する「統制的仮説（control hypothesis）」を扱う調査研究が重要となる。実際、本稿でいう「応用」、すなわち「当為」あるいは「統制的仮説」と称される「いかに為すべきか」という観点は、実践効果ならびにその測定としてソーシャルワーク調査研究においてもこれまで取り組まれてきたものである。例えば、武田（2004：40-41）が提示した、①問題や現象の理

解を目的とするリサーチ、②問題の説明を目的とするリサーチ、③実践の効果測定を目的とするリサーチ、という3つの区分からもこの点を読み取ることができる。また、これらに加えて4つめのリサーチとして、例えば芝野（2002）が提示している、実践アプローチの開発にも見ることができる。これらのリサーチでは、問題の理解、説明、支援の効果、援助方法の開発というような課題がそれぞれに設定されているものの、いずれもが利用者の問題解決を支援するためにソーシャルワーカーはどのように行為すればよいかを問うものである。このように、ソーシャルワーク調査研究では、「応用」という目的によってソーシャルワーカーの行為のあり様に対する示唆が含まれているという点を意識することが重要であるといえる。

（3）ソーシャルワーク調査研究の研究テーマ

次に、ソーシャルワーク調査研究の研究テーマの内容を整理するために、岩田（2006a）と日本ソーシャルワーク学会（2010）の試案を参照する。

岩田（2006a：11）は社会福祉の研究テーマについて以下のように整理する。なお、ここでも社会福祉と述べられているが、先述と同様、ソーシャルワークと読み替えてその内容を検討する。

- ①社会福祉が課題としている、あるいは「すべき」問題の解明。
- ②社会福祉の複雑に絡み合った「現実世界」を解きほぐし、「であること」（事実）、の意味や矛盾、なぜそうなるのかを、解釈可能な形で提示し、説明していく。
- ③事実の背後にある意図や価値を解明する。さらに社会福祉を一般的に説明する理論枠組みの生成、また社会福祉と関わる規範や倫理に関する研究。
- ④「なされたこと」の効果測定や評価。「なされたこと」を適切とする規準、あるいは適切としない規準それ自体も検討される。
- ⑤社会全体への影響。
- ⑥解決策や別の選択肢の提示。現実世界の課題や矛盾に対する「あるべき」選択肢や解決策を一定の証拠や予測を背景に研究者自身が提案する

こと、も含まれる(含まれなくてもかまわない)。

これによれば、ソーシャルワーク調査研究では、例えば、①ソーシャルワークが課題とする、あるいは「すべき」問題、②ソーシャルワークの複雑に絡み合った「現実世界」に見出される事実、③事実の背後にある意図や価値。ソーシャルワークを一般的に説明する理論枠組み、規範や倫理、④効果測定や評価ならびにその規準、⑤ソーシャルワークの社会全体への影響、⑥現実世界の課題や矛盾に対する解決策や別の選択肢の提示、といったテーマを設定できることが読み取れる。

また、日本ソーシャルワーク学会(2010)は2010年11月20日付の「日本ソーシャルワーク学会通信」にて、①ソーシャルワークの原理、②ソーシャルワークの実践モデルアプローチ、③リサーチ、④クライアント、⑤実践領域系、⑥専門職教育(含実習教育)、⑦その他(社会開発的な部分)という7つの領域で構成されるソーシャルワーク研究のカテゴリーの再編案を掲示した(p.6)。これによれば、ソーシャルワークは原理研究、理論研究、リサーチ研究、クライアント研究、実践研究、専門職教育研究といった研究テーマに細分できることがうかがえる。

前者が社会福祉、ソーシャルワーク内部の体系だけではなく社会全体の体系(system)との関係においてテーマを規定しようとするものであるのに対し、後者はソーシャルワークの内部体系からテーマを規定しようとするものであるといえる。このように、研究テーマをソーシャルワークの内外の体系と関連づけて意味づけることが重要であるといえる。ソーシャルワーク調査研究では幅広く研究テーマを設定することができるが、その社会的な存在意義や内部体系のあり方を通して、「応用」という目的を果たすことが求められるためである。

Ⅲ. 研究方法論：データ収集・分析と推論の関連性

(1) データ尺度とデータ収集

ソーシャルワーク調査研究では、ソーシャルワークの社会的意義と内部体系との関連から研究テーマを設定し、その研究において必要とするデータを明確にしていくことが必要となる。

先述のように、研究では具体的事象から得たデー

タに基づいて何らかの知見を導き出すことが求められる。そのためには、具体的事象からどのようなデータを収集するのかを決定することが課題となる。すなわち、研究テーマに照らして、どのようなデータをどのように集めるかという問いである。ここでいうデータには文字、文章、数値、書籍、写真、ビデオ等の様々な形態がある。データは文字や文章で表された質的データと数値で表された量的データに大きく区分される。例えば、利用者へのインタビューなどで生成されるテキストは質的データであり、サービス利用者へのアンケート調査に見られる年齢や経験年数などは量的データに区分される。

研究においてそのデータが有用であるかどうかは、例えばデータの信頼性や妥当性から検討することが必要となる。なお、信頼性とはいつも同じものが測定されるかどうか、妥当性とは測りたいものが的確に測定されているかどうかを意味する。言い換えれば、信頼性や妥当性が低いデータを使用した場合は、研究テーマに沿ってデータを分析し、その結果に基づいて適切な結論を導くことはむずかしいということに留意する必要がある。

データの信頼性や妥当性の検討では、そのデータを測るための一定の基準となる、言うなれば「ものさし」が必要となる。これは尺度(scale)といわれるものであり、名義尺度、順序尺度、間隔尺度、比率尺度の4つに区分される。この4つの尺度のうち、名義尺度と順序尺度は質的データならびに質的変数に対応し、間隔尺度と比率尺度は量的データならびに量的変数に対応する。そして、尺度は、名義尺度、順序尺度、間隔尺度、比率尺度の順でより多くの情報が含まれることから、比率尺度を順序尺度として取り扱うことはできても、その逆はできない。また、データに等間隔性を持たせたいのであれば、加減法を使用できる間隔尺度もしくは比率尺度を使用してデータを収集しなければならない点に留意しなければならない。

データをどのような方法で収集するかは重要な作業課題である。また、データ提供者の選定についても同様である。もし研究課題に見合ったデータを手に入れることができなければ、その研究を進めることはできない。そのため、そうした場合には、データを収集できるよう研究枠組そのものを再検討しなけ

ればならない。

データ収集は研究方法によって規定される。データ収集法としての研究方法については、例えば Merriam と Simpson (2000 = 2010) は目的と手続きの違いから、実験デザイン、記述デザイン、歴史的および哲学的な探求等に区分している。また、ソーシャルワーク調査研究の領域では、例えば Kirk (1999) は目的の相違から実験法、調査法、質的調査法に区分し、Thyer (2010) は量的調査法、質的調査法、概念調査法をあげている。渡部 (2010) は、研究方法は実験と非実験に大別し、さらに実験は純粋実験と疑似実験に、また非実験を探索的、記述的、相関的の3つに細分されるとした上で、ソーシャルワーク調査研究では探索的、記述的、相関的、疑似実験的の4種類があると指摘している。このように研究方法にはその手続きからいくつかの区分がある。このうち、ソーシャルワーク調査研究では統制群をおく実験的な研究方法の実施は対象者数の確保や倫理的理由からむずかしいことが多い。そのため、単一事例実験計画法のような、少数の事例に対する介入前後の時間的変化に着目する調査や、アンケート調査に代表される一定のサンプル数を確保した量的調査が中心とならざるをえない。結果として探索的、記述的、相関的研究が多くなることが推察される。

いずれにしても、どのような研究方法を選択するかによってデータを収集するための手続きが異なる。そのため、研究枠組を考える際にはデータの尺度水準とともにデータの収集方法についても考慮しておかなければならないといえる。

(2) データと分析法の関連性

分析では、データを研究作業において生成あるいは設定した概念に分類し、その概念間の関係性を問う。齋藤 (2005) は「分析の出発点は比較や分類である。／分析は要素と関係による構造化ともいえる。一般に分析では『分類（グループ化）』と『因果関係』という2つの分析が基本的であり重要である」(p.155) と述べている。また、林 (2010) は以下のように述べる。

研究とは検討すべき概念を核としながら、統合と分析を繰り返していく行為である。概念は

データ収集においては「何に注目するか」の分析視点を導く。量的研究法では、その視点が事前に研究者によって決定され、測定項目としてデータ収集を行う……（中略）……質的データも基本的には、(1) 分析対象となる概念を決定する、(2) 複数の概念の関係性を検討する、という2段階の分析を行うことになる (p.162)。

このように、分析はデータの比較や分類を通してデータの関係性を検討する作業であるといえる。この分析をデータの種別との関連でデータ分析を考えた場合、①量的データの量的分析、②質的データの質的分析、③質的データの量的分析、④量的データの質的分析といった4つの類型に区分でき、①は統計解析、②はオープンエンドなコーディング化、③は非数量的データのカテゴリー分類といった分析が考えられる (林 2010: 157-158)。なお、④は、尺度の特性が原因となり、データを変換することができず分析できない。以下では、分析結果の意図するところに着目して、3つの分析法を「記述としての概念の生成」、「説明としての分類・比較」、「応用としての相関因果」に区分し、その特性を述べる。

「記述としての概念の生成」は、インタビュー記録などの質的データを対象として、そのテキストの意味する内容を分析し、その結果として新たな概念生成を図り、もって未知の事実の発見やその特性を目指すものである。質的データを用いた分析では、データを批判的かつ詳細に検討し、その結果として生成された概念の分類・比較を通して、具体的事象の再解釈を行うことが目的となる。すなわち、生成された複数の概念について、特定のカテゴリーによって分類、あるいは比較することができるかどうか、あるいは対象として取り上げた具体的事象について新たな意味や解釈を見いだすことができるかどうかを検討課題となる。主な分析法には、例えば現象学的方法やグラウンデッドセオリーなど概念生成とその解釈に特徴をもつものがあげられる。

この区分のソーシャルワーク調査研究ではテキストデータが必要となる。例えば、研究テーマならびに研究課題との関連から、利用者やソーシャルワーカーに対してインタビューを行うことにより、分析に必要なテキストデータを収集することができ

る。そして、「記述としての概念の生成」を通して、利用者やソーシャルワーカーの思いや考えが明らかになるとともに、さらにはソーシャルワークが有する未知なる問題を発見することも可能になる。

「説明としての分類・比較」は、主として質的データを量的に分析するものである。例えば、内容分析 (content analysis) はこれに相当する分析法といえる。質的データを数量化して分析する場合には、データの関係性に着目して目的変数を設定できるかどうか、さらには変数間の関係を検討できるかどうかといった点が課題となる。研究の目的は主として説明であり、この場合の期待される出力結果は概念の分類ならびに概念間の比較である。すなわち、対象とする概念が他の概念との関連性においてどのように使用されるのかを明らかにすることが課題となる。ここでも質的データを分析するため、「記述としての概念の生成」と同様にテキストデータを収集する必要がある。

ソーシャルワーク調査研究では、例えば、利用者の特徴の理解、教科書の構成内容の把握、論文テーマの傾向の分析、学科科目の内容の把握、実践記録や機関資料による業務分析など、テキストで用意されたデータをいくつかの概念の関係性に着目してとらえていくための方法である内容分析が有用である (塚山 2011)。したがって、課題とすべきは、分類・比較に必要となるカテゴリーを事前に用意しておくことである。その対策として例えば、「記述としての概念の生成」で得た概念を用いて概念の分類・比較を行うことを考えることができる。

「応用としての相関因果」は、量的データを量的に分析することにより得ることができる。ここではデータ間の関係性の存在が仮定されており、収集した量的データから相関あるいは因果関係に関するモデルが成立すると見なされる必要がある。量的データの分析では多変量解析などの統計的処理が行われる。この多変量解析はいくつか分析手法の総称であるが、目的変数 (外的基準) のある場合に使用するものとならない場合に使用するものに区分される。目的変数 (外的基準) のある場合に使用される方法は、「特定の現象に影響を及ぼしている変数が何なのかを探り、変数と変数の因果関係を明らかにして、管理・統制を行うための方針や戦略をどのようにしたらよいのか」

(中山 2010:6) を明らかにするためのものである。また、ない場合の方法は、大量のデータを単純化し、重要な情報や興味ある仮説を発見するために使用される (中山 2010)。

ソーシャルワーク調査研究でも特定の理論に基づいた仮説から因果関係モデルを構築し、その検討を行う調査研究が見られる。アンケートの選択項目や自由記述のテキストを数量的に処理する場合、「応用としての相関因果」を見いだし得る可能性があり、多変量解析を使用することが考えられる。また、データに目的変数 (外的基準) がなく、因果関係が仮定されない場合にあっては、概念間の分類・比較を行うために多変量解析を使用することが考えられる。

以上のように、データと分析法との関連は分析結果が意図するところから、「記述としての概念の生成」、「説明としての分類・比較」、「応用としての相関因果」に区分した。これらは、「記述としての概念の生成」と「説明としての分類・比較」、「説明としての分類・比較」と「応用としての相関因果」というように重なり合う関係にある。そのため、分析では研究目的に照らしてデータと分析法を組み合わせていくことが必要である。

(3) 研究方法論の3つの観点

分析結果から結論を導く過程では、どのような道筋や考え方に基づいてそれを行うのかを明確にしておくことが重要である。これは収集したデータからどのように結論を導くかに関する問題と言える。この「分析結果から結論を導くための考え方や道筋」をここでは「研究方法論」と称する。

研究方法論を考える上では、「推論」(inference) において研究テーマとの関係から結果を読み解いていくことが課題となる。King, Keohane と Verba は「社会科学を単なる観察と区別し、社会科学たらしめている際立った特徴とは、確立された調査の手続きを体系的に用いることによって、妥当な推論を導き出そうとすることにある」(King, Keohane & Verba 1994 = 2004: 5) と述べている。ここでいう推論とは「既知の事実を用いて未知の事実を推測する過程」(King, Keohane, & Verba 1994 = 2004: 55) を意味する。そして、King, Keohane, & Verba (1994 = 2004: 6-9) は優れた科学的研究のスタイルには、①研究の

目的が推論であること、②手続きが公開されていること、③結論は不確実であることが認識されていること、④科学的研究とは一連の推論のルールを厳守した研究であり、「科学」の中身は主として方法とルールであって、研究の内容・主題ではないことが認識されていること、の4つの特徴が備わっていると述べている。

ソーシャルワーク調査研究は、社会科学の一領域として推論を経て未知の事実としての結論を導き出すことを目指す。そのため、結論を導く考え方を明確にする必要がある。以下ではこの点について次の3つの観点から整理する。1つめは結果の指向性に着目した、個性記述的研究 (idiographic) と法則定立的研究 (monothetic) である。2つめは推論の過程に着目した研究方法論として、帰納法 (induction) と演繹法 (deduction) である。そして3つめは、データの性質の違いに着目した研究方法論として、定量的研究 (quantitative research) と定性的研究 (qualitative research) である。なお、本稿では量的研究と定量的研究ならびに質的研究と定性的研究は同義として使用する。

1つめは個性記述的研究と法則定立的研究であり、これらはデータの分析結果の指向性に着目した区分である。前者は「知識を現地に根ざし状況づけられたものだと考え」、「特定の事例の詳細に注意を向ける」ものであり、後者は「一般化された知識、普遍的な法則と演繹の説明を、主に大規模なサンプルから得られる蓋然性にもとづいており、日常生活の制約の外部にあるもの」とされる (Punch 1998 = 2005: 44)。個性記述的研究は、例えば岩間 (2005) に見られるように、臨床的なソーシャルワークでは少数の事例を対象とした事例研究や事例検討が代表的である。一方、法則定立的研究は、一定程度以上のサンプル数や比較できる対照群が必要となることから、ソーシャルワークの臨床場面で実施することはむずかしい。そのため、結果の普遍化には限界があるものの、例えば、武田・立木 (1981) に見られるように、効果測定法として単一事例実験計画法などが取り上げられてきた。

2つめは未知の事実を推論する過程に着目した研究方法論としての帰納法と演繹法である。Babbie は帰納法を「個別の具体的な事象から、一般的な法則

や命題を導き出す方法」であり、「社会調査において、個別に観察されたデータを集めて相互に関連づけ、一般的なパターンを見出す時に用いられる」と規定し、「一部の特定の観察結果から、所与の事例すべてに当てはまるパターン、つまりある程度の一般的な法則性を見出す方法」と述べている (Babbie 2001 = 2003: 26-28)。同じく、演繹法は「一般的規則性を用いて、個別の事象を説明する方法」であり、「論理あるいは理論の上で期待されるパターンが、実際に存在しているかどうかを検証するために観察を行う」方法と述べている (Babbie 2001 = 2003: 26-28)。そして、どちらも科学に有効な方法で相互に補完的なものであると述べている。

ソーシャルワーク調査研究では、帰納法的研究法は、例えば当事者研究として新たな概念形成や仮説形成といった点に意義が認められる (大瀧 2009)。また、演繹的研究法は「理論と実践の経験の妥当性を検証」し、その結果に基づいて「理論と実践の双方に対して修正や改善を促すフィードバック機能を有している」研究法であるとされる (和気 2009: 25)。これらは研究者の研究対象に対するアプローチ方法を規定するものである。どちらかに優劣があるというのではなく、先の個性記述的研究と法則定立的研究と合せて、研究の目的によって選定されるべきものであるといえる。

3つめは定量的研究 (もしくは量的研究) と定性的研究 (もしくは質的研究) である。前者は量的データを使用する研究であり、後者は量的でないデータを使用する研究である。King, Keohane と Verba (1994 = 2004) は定量的研究を次のように規定する。

定量的研究は、数字と統計手法を用いる。定量的研究は、ある現象の特定の側面を数量的に測定し、それに基づいて研究する傾向がある。また、一般的な記述をしたり、因果関係の仮説を検証するために、具体的な調査対象からの抽象化を行う。定量的研究は、他の研究者によっても容易に追試可能な測定や分析を目指すのである (King, Keohane, & Verba 1994 = 2004: 2)。

定量的研究における思考モデルでは「研究者は理論から導きだされた仮説あるいは問いを検討するこ

とによって、理論の検証あるいは実証をする」(Creswell 2003 = 2007: 147) とされるように、定量的研究は観察可能な形態で定義された数量的変数を事前に設定した仮説に基づいて分析し結論を導くところに特徴が見いだせるといえる。

一方、定性的研究は以下のように規定される。

定性的研究には、広範囲なアプローチが含まれるけれども、定義上、これらのアプローチは、数量的な測定に依拠するものではない。定性的研究は、一つ、もしくは少数の事例に着目し、徹底的な聞き取り調査を行ったり、歴史的資料を綿密に分析する傾向を持つ。方法論的には論証的であり、ある出来事や観察される単位を、おおまかに、あるいは包括的に説明することに関心をもつ傾向にある(King, Keohane, & Verba 1994 = 2004: 3)。

定性的研究では、研究協力者から集めた詳細な情報を、カテゴリーあるいは主題、さらには幅広いパターン、理論、あるいは一般化へ発展させ、個人の経験や既存の文献と比較するとされるように(Creswell 2003 = 2007: 147)、詳細な情報をカテゴリー化することにより論証的に説明するところに特徴が見いだせるといえる。

なお、『『定性的』研究もしくは『定量的』研究のどちらか一方にぴったりと収まる研究は、ほとんどない。最も優れた研究は両者の特徴を備えている』(King, Keohane, & Verba 1994 = 2004: 3) とされるように、一方だけを強調するのではなく、両方の特性を理解しておくことが重要である。Creswell と Plano Clark (2007 = 2010: 20) はこうした分析法を混合研究法(Mixed Methods Research)と称して以下のように定義づける。

混合研究法は研究方法論と研究手法を兼ね備えた調査研究デザインである。研究方法論としては、研究の入り口である哲学的仮定から結論を引き出すまでの調査研究プロセスのあらゆるフェーズにおいて質的・量的アプローチでデータ収集、分析、混合するものである。研究手法としては、1つの研究あるいは順次的多元的な

研究において量的・質的データを収集し、分析し、混合するものである(p.20)。

また、今日のソーシャルワーク調査研究でも、こうした混合研究法の考え方に基づいた研究が教示される。例えば、池埜(2010)はこの研究法を「タイプの異なるデータ、すなわち質的、量的データを併合したり(merge)、つなぎ合わせたり(connect)、または埋め込む(embed)ことで調査デザインを設定し、分析結果を導き出す調査法」(p.145)と述べている。

ここではデータ収集、データ分析、研究方法論といった点から研究枠組を考えた。まとめると、研究枠組とは、どのようなデータをどのような方法で収集し、そして分析して結果に基づいた推論を経てどのような結論を導くかに関する体系化された方略であることがわかる。そして、この体系にはデータの性質や分析法、推論の内容からいくつかの特性を見いだすことができる。ソーシャルワーク調査研究では、ソーシャルワークが有する臨床性から、特定の事例を対象とした個性記述の性質を有する帰納的研究法が思い浮かぶところである。しかしながら、ソーシャルワークの効果性を検証しエビデンスを確立するためには、法則定立を意図した演繹的研究法も重要であるといえる。今日においては、それぞれの特性をふまえてこれらを組み合わせて研究枠組を考えていくことが必要とされているのである。

IV. 研究枠組の構成要素：研究課題、データ、分析法の連関性

これまで述べてきたことをふまえて、研究枠組は「研究者」、「事象」、「データ」、「分析法」、「結果」、「理論的枠組」といった項目から構成されるとまとめておきたい(図1参照)。なお、「研究テーマ」と「研究課題」は研究者が研究を始める時点で考えておくものであることから「研究者」に含めた。また、「データ」は「質的データ」と「量的データ」に、主たる「分析法」は「定性的研究法」と「定量的研究法」に、そして、「結果/結論」は「記述としての概念生成」、「説明としての分類・比較」、「応用としての相関・因果」の3つに区分した。そして、これらを組み合わせることにより、①質的データと定性的研究

法において概念生成を行い個性記述や発見を目指す「記述としての概念生成」、②質的データと定量的研究方法において概念の分類・比較を行い、研究対象に関する個性記述や発見あるいは仮説の検証を目指す「説明としての分類・比較」、③量的データと定量的研究方法において相関・因果関係を検証し法則定立を目指す「応用としての相関・因果」という、互いに関連し合い成立する調査研究の構造を想定した。

こうした調査研究の構造をふまえ、これらの要素の連関性について、ソーシャルワーク調査研究の観点からまとめておく。

- ①「研究者」は「具体的事象」をソーシャルワークに関する問題と意識することによって「研究テーマ」を設定することができる。

研究者が、ソーシャルワークとの関連において具体的事象を問題と意識することで、その事象はソーシャルワーク調査研究の研究テーマとして考えることができるようになる。換言すれば、問題として意識されないものは研究テーマとして設定することはできない。その意味において、日々の実践活動をソーシャルワーク調査研究の対象として意識することがテーマ設定の第一歩であるといえる。

- ②「研究者」は「研究課題」に基づいて「具体的事象」に対峙し、必要となるデータを収集する。

実践事例からは様々なデータを収集できる可能性がある。実践場面における面接と同様に、ソーシャルワーカーや利用者へのインタビューを計画する場合、研究者がどのような質問するかによって収集できるデータも異なる。研究者は事前に質問内容を決めておくことにより、研究課題の解明において必要となるデータを収集することができる。また、既存データを二次利用しようとする場合は、そのデータが研究課題に対応しうるものかどうかを判断する必要がある。

- ③「研究者」は「データ分析」の「結果」から、ソーシャルワークの「理論的枠組」を参照しつつ「推論」を行い「結論」を導く。

推論を行うためにはデータの種別と分析法の組み合わせに注意する必要がある。その際、データの種別は収集する段階で分析法とともに設

定されること、また、分析法にしたがって推論可能な範囲があることに留意しなければならない。例えば、ソーシャルワーカーや利用者へのインタビュー内容を定性的に分析した場合、新しい概念を生成し論じることはできるが、一般化することはむずかしい。そして、ソーシャルワークの理論的枠組を参照して結果を考察し、推論を経て研究課題に対する結論を導く。

- ④「結論」に基づいて「研究課題」の解決を図るとともに、新たな「研究テーマ」や「研究課題」を設定する。

推論を経て導かれた結論は、次のソーシャルワーク調査研究を行う際に参照することができる。ソーシャルワーカーや利用者へのインタビューによって生成された概念ならびに考察で得られた結論を用いて、研究者は次の研究課題を設定し調査研究を行う。

なお、これらの点を実践活動に置き換えて考えてみると、それまでに体験した事例を活かして新たな問題に対応する過程に通じるものであるといえる。調査研究によって得られた結論は、実践活動では「実践知」(practice wisdom)として個々のソーシャルワーカーに蓄積されると考えられる。実践知と理論的枠組の相違は他者がそれをテキストとして参照できるかどうかにあるといえ、その意味では、実践知を他者が活用できるようにすることはソーシャルワークの重要な研究テーマの一つであるといえる。

最後に、ソーシャルワーク調査研究では「応用」が重視されるという意味において、研究者は自らの研究に対して自己批判的態度で臨むことが望ましいと考えられる。岩田（2006b）は以下のように述べる。

社会科学と呼ばれる、社会を対象とした学問分野では、伝統的に「価値自由」（価値中立性）があるべき姿であるとされ、特定の思想信条や価値観に基づいて仮説を構築することは望ましくないとされる。しかし、制御科学は目標とする望ましい状態を想定し、その実現のための社会制御（統制）の方法を考える。このため、「何が望ましい状態といえるのか」という部分で特

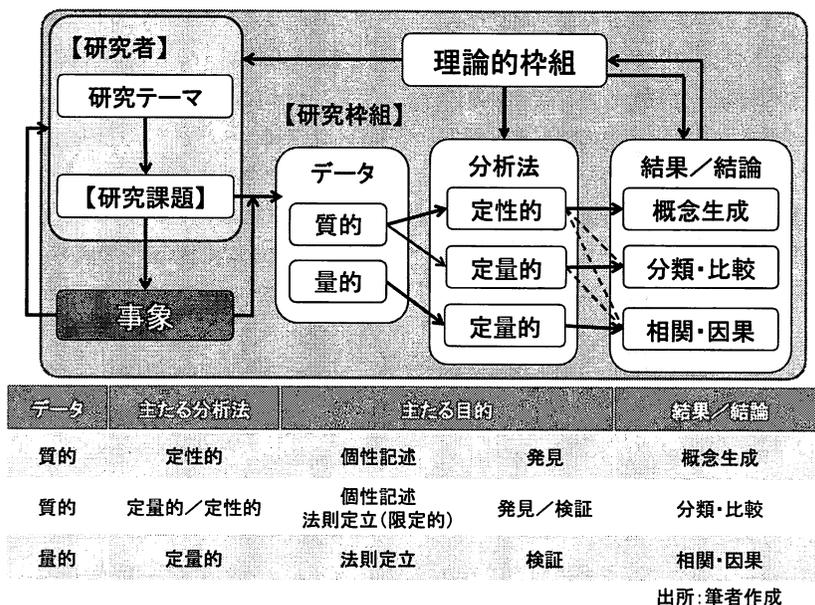


図1: ソーシャルワーク調査研究における研究枠組のイメージ (試案)

定の価値を前提にせざるをえない。社会福祉学は一部で制御科学としての側面をもつが、制御科学の立場に立つものは、その価値前提に自覚的である必要があり、常に自己批判的態度をとる必要があるといえる。(p.85)

ソーシャルワークは利用者の生活に関わる実践活動である。ソーシャルワーク調査研究では、人びとの生活の望ましさとその実現に向けたソーシャルワーカーの支援のあり方を問うという点において、研究目的では「応用」を意識することが求められる。先の指摘にあるように、研究者は自身の研究に対して自己批判的に向き合うことで、ソーシャルワーク調査研究をソーシャルワークの価値に照らしてどのような進めるのか、言い換えれば、どのような調査研究を目指すのか、そのために対象をどのようにとらえ、どのような方法でアプローチすることが望ましいのかを自らに問い続けることができると考える。

V. おわりに

本稿ではソーシャルワーク調査研究を①目的と対象、②データ収集・分析と推論の関連性、③研究課題、データ、分析法の関連性という3点から考察し、そのまとめとして以下の4点を掲げた。それらは①

「研究者」は「具体的事象」をソーシャルワークに関する問題と意識することによって「研究テーマ」を設定することができる、②「研究者」は「研究課題」に基づいて「具体的事象」に対峙し、必要となるデータを収集する、③「研究者」は「データ分析」の「結果」から、ソーシャルワークの「理論的枠組」を参照しつつ「推論」を行い「結論」を導く、④「結論」に基づいて「研究課題」の解決を図るとともに、新たな「研究テーマ」や「研究課題」を設定する、である。

なお、本稿はソーシャルワーク調査研究をテーマとしたが、その内容はソーシャルワーカーの実践に対する科学的態度を考察したものと見ることができると考える。利用者の問題を利用者とともに設定し、解決に向けて支援を行うソーシャルワークは、個人の解釈のみによって行われるものではなく、ソーシャルワーカーの実践知や科学的推論に基づいて行われるものだからである。この点に関する考察は今後の課題としたい。

注)

- 例えば以下のようなものをあげることができる(社会福祉士養成講座等に含まれるものを除く)。

・北川清一・佐藤豊道編(2010)『ソーシャルワークの研

- 究方法—実践の科学化と理論化を目指して』相川書房。
- ・ 齊藤嘉孝 (2010) 『社会福祉調査—企画・実施の基礎知識とコツ』新曜社。
 - ・ 立石宏昭 (2010) 『社会福祉調査のすすめ—実践のための方法論 [第2版]』ミネルヴァ書房。
 - ・ 田垣正晋 (2008) 『これからはじめる医療・福祉の質的研究入門』中央法規出版。
 - ・ 岩田正美・小林良二・中谷陽明他編 (2006) 『社会福祉研究法—現実世界に迫る 14 レッスン』有斐閣。
 - ・ 志村健一 (2004) 『ソーシャルワーク・リサーチの方法』相川書房。
 - ・ 武田丈 (2004) 『ソーシャルワーカーのためのリサーチ・ハンドブッカー—ニーズ調査から実践評価までのステップ・バイ・ステップガイド』ミネルヴァ書房。
 - ・ 米本秀仁・高橋信行・志村健一編著 (2004) 『事例研究・教育法』川島書店。
 - ・ 畠中宗一・木村直子 (2004) 『社会福祉調査入門』ミネルヴァ書房。
 - ・ Brueggemann, William G., 柳田雅美訳 (2003) 『ソーシャルワーク調査研究課題の進め方』トムソンラーニング。
 - ・ 平山尚・武田丈・呉裁喜他編 (2003) 『ソーシャルワーカーのための社会福祉調査法』ミネルヴァ書房。
 - ・ 久田則夫編 (2003) 『社会福祉の研究入門—計画立案から論文執筆まで』中央法規出版。
 - ・ 坂田周一 (2003) 『社会福祉リサーチ—調査手法を理解するために』有斐閣アルマ。
 - ・ 星野貞一郎・金子勇編著 (2002) 『社会福祉調査論』中央法規出版。
 - ・ 井村圭社 (2001) 『社会福祉調査論序説』学文社。
 - ・ 根本博司・高倉節子・高橋幸三郎編著 (2001) 『初めて学ぶ人のための社会福祉調査法』中央法規出版。
- 引用・参考文献
- Babbie, Earl (2001) *The Practice of Social Research*, 9th ed. (=2003, 渡辺聰子監訳『社会調査法1』培風館；=2005, 渡辺聰子監訳『社会調査法2』培風館.)
- Creswell, John W. (2003) *Research Design: Qualitative, Quantitative, and Mixed Methods Approaches*. (=2007, 操華子・森岡崇訳『研究デザイン—質的・量的・そしてミックス法』日本看護協会出版会.)
- Creswell, John W. & Plano Clark, V. L. (2007) *Designing and Conducting: Mixed Methods Research*. (=2010, 訳『人間科学のための混合研究法—質的・量的アプローチをつなぐ研究デザイン』北大路書房.)
- 林智幸 (2010) 「量的研究者は質的データ分析法をどのよう
- うに学ぶか？」『静岡英和学院大学短大部紀要』8, 157-166.
- 池埜聡 (2010) 「ソーシャルワーク研究における質的・量的ミックス法」北川清一・佐藤豊道編『ソーシャルワークの研究—実践の科学化と理論化を目指して』相川書房, 143-165.
- 岩間伸之 (2005) 『援助を深める事例研究の方法—対人援助のためのケースカンファレンス [第2版]』ミネルヴァ書房。
- 岩田正美 (2006a) 「なぜ、何を研究するのか」岩田正美・小林良二・中谷陽明他編『社会福祉研究法—現実世界に迫る 14 レッスン』有斐閣, 3-18.
- 岩田正美 (2006b) 「研究をどう設計するか」岩田正美・小林良二・中谷陽明他編『社会福祉研究法—現実世界に迫る 14 レッスン』有斐閣, 75-114.
- King, G., Keohance, R. O., & Verba, S. (1994) *Designing Social Inquiry*. (=2004, 真淵勝監訳『社会科学のリサーチ・デザイン—定性的研究における科学的推論』勁草書房.)
- Kirk, Stuart A. ed. (1999) *Social Work Research Methods: Building Knowledge for Practice*, NASW Press.
- Merriam, Sharan B. & Simpson, E. L. (2000) *A Guide to Research for Educators and Trainers of Adults*. 2nd ed. (Updated). (=2010, 堀薫夫監訳『調査研究法ガイドブック』ミネルヴァ書房.)
- 中山厚穂 (2010) 『Excel ソルバー多変量解析—ポジショニング編』日科技連。
- 日本ソーシャルワーク学会 (2010) 「日本ソーシャルワーク学会通信 No.95」(2010年11月20日発行版)。
- 大瀧敦子 (2009) 「ソーシャルワーク研究における帰納的研究方法の意義と課題」ソーシャルワーク研究, 35 (2), 34-41.
- Punch, Keith F. (1998) *Introduction to Social Research: Quantitative and Qualitative Approaches*. (=2005, 川合隆男監訳『社会調査入門—量的調査と質的調査の活用』慶應義塾大学出版会.)
- 齋藤雄志 (2005) 『知識の構造化と知の戦略』専修大学出版局。
- 傘山太 (2011) 「ソーシャルワーク研究法としての内容分析」人間健康学研究1+2, 21-32.
- 芝野松次郎 (2002) 『社会福祉実践モデル開発の理論と実際—プロセティック・アプローチに基づく実践モデルのデザイン・アンド・ディベロップメント』有斐閣。
- 高橋順一 (1998) 「研究とは何か」高橋順一・渡辺文夫・大淵憲一編著『人間科学研究法ハンドブック』ナカニシヤ出版, 1-9.

- 武田丈 (2004) 『ソーシャルワーカーのためのリサーチ・ハンドブック—ニーズ調査から実践評価までのステップ・バイ・ステップガイド』 ミネルヴァ書房.
- 武田健・立木茂雄 (1981) 『親と子の行動ケースワーク』 ミネルヴァ書房.
- Thyer, Bruce ed. (2010) *The Handbook of Social Work Research Methods* 2nd ed. Sage.
- 友枝敏雄 (2000) 「社会学の〈知〉へ到達する」 今田高俊編『社会学研究法・リアリティの捉え方』 有斐閣アルマ, 269-289.
- 和気純子 (2009) 「ソーシャルワークの演繹的研究法」 ソーシャルワーク研究, 35(2), 25-33.
- 渡部律子 (2010) 「ソーシャルワークの研究手法」 北川清一・佐藤豊道編『ソーシャルワークの研究手法—実践の科学化と理論化を目指して』 相川書房, 15-36.